

MACF礼拝説教要旨

2021年5月2日

「愛・勤勉・祈り」

ローマの信徒への手紙12章9節～

12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、

12:10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。

12:11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。

12:12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。

++++

パウロはキリストに愛されている人たちがどのような気持ちで、またどのような態度で生きていくべきか教えています。

教会の中で育てるべき「生き方の心がけ」であり、この心がけを教会の中での人間関係に活かし、また社会の中で活かしながら生きるようにと勧めています。

1) 偽りのない愛

「偽りのない愛」と書かれている以上、きっと「偽りの愛」と言われるものも存在するのでしょう。

「偽りの愛」とは「偽善」「うわべだけ、言葉だけの約束」と言えると思います。

そもそも「人の為と書いて「偽り」（いつわり）と読む」と言われているくらいですから、人の為、人の為と大声をあげて注目を集めておきながら、結局自分を利することにしか心が向いていないという指導者や出来事を見るとそこには「偽りの愛」しかないのだなと思います。

「人のため」と大袈裟に犠牲を強いる発言や言動、奨励には、気をつけなければなりません。

「人のため」と考えて行動することは悪いことではありません。でも、愛は自己主張をするものではないのです。栄誉が自分のところに残るための

道具として「愛」を利用してはならないのです。

2) 兄弟愛と尊敬の心

パウロは「兄弟愛」の存在を教えています。イエス様に愛されていることがわかってくると他者に対して今までとは違う見方ができるようになってきます。

その一つは「兄弟愛」です。そしてパウロは「互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」と語り、これは相互交流であることを教えています。

自分だけが与え続けるわけではなく、受け取ることも経験しなければなりません。

愛するというのは「与える」こともあるし「受け取る」時もあるのです。

同様に愛とは「語ることもあり、黙ること」もあります。互いの益となるために心を使う態度が重要なのです。自分だけが受け取るというのではなく、互いに受け取り、互いに分かち合うことが求められています。

そして、相手に対する態度が語られています。

「相手を優れた者と思いなさい」とあるからです。これは、相手を自分より能力がある存在と考えることではありません。

例えば、私が保育園の子ども達と向き合うとき、その子ども達を自分よりも優れたものとして受け止める場合、能力が優れているとか、若さが優れているとか、そういうことではないのです。相手が、「自分より高貴な立場にある」存在として認めることです。

相手が「神に愛されている」という事柄について、わたしより優れているとみなすのです。つまり、私が人に会う時、それが小さな子どもでも、神様が「この人は私が心から愛している存在だよ」と私にささやいてくださっていることに心を向けるのです。

神様に直接愛されている存在として相手を見るのです。そうすると、相手を優れた存在と認めない

わけにはいかなくなります。

神様が直接その人の後ろ盾としていてくださるわけですから。そこで相手への尊敬の心が生まれます。

3) 勤勉、主との交わり

12:11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。

この言葉はいつも覚えておきたい言葉ですね。怠惰を戒め、勤勉に働くこと、勤勉に主とともに生きる姿勢を保つこと。主に仕えるとは、主を礼拝することであり、主に聞くことであり、その心を教えてもらって他者と分かち合うことです。

4) 希望、祈り

12:12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。

パウロはテサロニケの信徒への手紙第一の中にこう書きました。

5:14 兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。

気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。

すべての人に対して忍耐強く接しなさい。

5:15 だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。

お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい。

5:16 いつも喜んでいなさい。

5:17 絶えず祈りなさい。

5:18 どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。

++

いつも喜ぶためには「希望」を発見することが重要です。神様の約束の言葉、励ましや慰めの言葉を発見し、それを土台に気落ちせずに喜ぶのです。それを土台にして苦難に耐えるのです。

そして「たゆまず祈りなさい」とパウロは勧めます。この部分については、最近いろいろ考えさせられています。

「どのようにしたらたゆまず祈れるのか」

「絶えず祈りなさい」とはどうしたらよいのか。

キリスト教の伝統の中で教えられた定型の祈りがあります。「主イエス・キリスト、私を憐んでください」という祈りです。グレゴリオ聖歌で「キリエ」というのはそれを歌にしたものです。

そして、修道院などではこの短い祈りを長い時間唱える習慣が大切なこととして教えられてきました。

その言葉が「イエス、私を憐んでください」となり「イエス、憐んでください」となり「イエス」だけを唱える祈りとしても大切な祈りの言葉として教えられてきました。それはまさに「御名を唱える祈り」です。

息を吸いながら「主イエス」吐きながら「私を憐んでください」と唱えるのです。

あるいは息を吸う時は無言で、吐きながら「主イエス」とだけ唱えることもできるでしょう。

祈りは「願い」という要素がありますが、私たちに必要な祈りは「神の臨在をより深く味わう」という面があります。ですから、イエスの御名を唱えるだけでイエス様と一緒にいてくださり、助けて下さり、支えてくださるわけです。

私たちが神様に自分の出来事を説明しなくても、神様はご存知ですから、そのすべてをこの「イエスの御名」に委ねるのです。

+++

今朝の聖句を心に留め、今週も具体的な生き方のなかで自己吟味をしながら主とともに歩みましょう

++++++

MACF礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/VNsnuQ1JNOI>